

Library News

No. 9

July, 1981

滋賀医科大学附属図書館報

目	次
館長就任にあたって	1
近代医学名著シリーズ ①	3
人工頭脳と図書館	4
古医書へのご招待	5
図書館の活動	6

館長就任にあたって

附属図書館長 友吉唯夫

尾崎良克館長が副学長に就任されたあと、6月1日付をもって図書館長に発令されました。私のごとき外科系臨床講座に所属していて、時間的余裕もとばしい者が、はたしてこの任にたえうるかどうか、はなはだ心もとないしだいでありますが、選ばれたからには附属図書館のために微力を傾注するつもりであります。カントの「汝なすべきがゆえに、なしあとう(Du kannst, denn du sollst)」ということばがありますが、まさにそのような心境であります。

本学附属図書館の歴史は、大学そのものの歴史と同じく、まだ浅いわけではありますが、野崎前々館長が初代館長として、とくに集書と建築に情熱を傾けられ、学部はもちろん大学院設置基準をも満たしてあまりある内容的充実を達成されました。尾崎前館長は誠実をもって館の発展のために尽力されておりましたのに、任期未了で館長職を去られたのは残念なことでもあります。しかし、今後も高い見識のもとに図書館を含めて、大学の運営にあられるわけで、関係がなくなったわけではありませんので、ひきつづきご指導、ご助言をいただけることはうれしいことでもあります。

さて、大学図書館はいま大きな変革期を迎えているとあって過言ではありません。Libraryというのは、本の集積所というのがもともとの意味ですが、こんにちの図書館は活字情報だけでなく、視聴覚教材などの、映像、音声まで保管するようになりました。そして、医学情報を検索するための端末

装置などを配し、電々公社のような機能まで備えるに至りました。こうなると、もはや情報資料館と改名したほうがよい状態であります。

現在 Index Medicus に掲載されているタイトル数は約 2,400 でありますが、本学図書館はその約 4 分の 1 を収納しております。これはたいした所有率であると思います。しかし、所有件数のみを誇りうる時代は過ぎました。図書館の学術雑誌は、すべて全国の研究者の共有財産とみなされて、文献所在情報は全国図書館に行きわたり、相互利用、相互検索サービスが日常におこなわれるようになるからであります。ことばをかえていいますと、研究者にとって、全国の大学図書館が利用の対象であるということになります。各大学図書館は、そのアクセスの便宜を提供することになります。

図書館が変革期にあることの、もう一つの現実、機械化の普及ということでありましょう。図書館業務そのものの機械化、情報検索、情報管理の機械化など、好むと好まざるにかかわらず、その方向に進んでいくでありましょう。たとえば最近ある会社が開発したブックディテクションシステムなどもその 1 例であります。機械化によって、心のかよったサービスが失われていくようでは困ったものです。人間と機械の調和が今後の課題でありましょう。

変革期であることの第三の現実、むしろ危機的側面ではありますが、雑誌・図書に値上りに比し予算面の伸びが全く期待できない昨今の財政上の硬直であります。全国の大学図書館が共通に直面しているこの難問の解決には、大学当局のご支援と、全関係者のご理解を得なければなりません。

本学の図書館は、研究図書館であることに一次的な存在意義があると理解しております。しかし学習図書館、教養図書館としての機能もおそろかにすべきではありません。現に図書館という空間に滞在して時間をすごす人の多くは、学習と教養のための読書にあてており、研究者は必要情報を複写して持ち帰る人が多いようです。

図書館の管理・運営は非常にむずかしく、図書の分類一つとっても、高度の専門的知識を要します。わが国でもようやく国立の図書館情報大学ができ、図書館学 (library science) を修めた人を世に送ろうとしております。本学図書館には 8 名もの司書資格を有する専門家が豊富な経験をもとに日夜業務に励んでおり、利用者みなさまの多様なご要望に応じたいと願っております。

図書館所蔵の書物は一人でも多くの方の眼に触れ、研究や心の糧となることを、また図書館の扉は一人でも多くの方によって開けられることを欲しております。より、気軽に図書館へおいでいただくよう (来、ぶらり//) お待ちしております。また、この立派な図書館が、質量ともにさらに充実・発展し、大学本来の使命に貢献できるよう、関係各位のご指導とご援助をお願いいたしまして、ごあいさつのしめくりといたします。



近代医学名著シリーズ ①

F. Treves 共著 独英医学用語辞典 (1890)
H. Lang

友吉唯夫

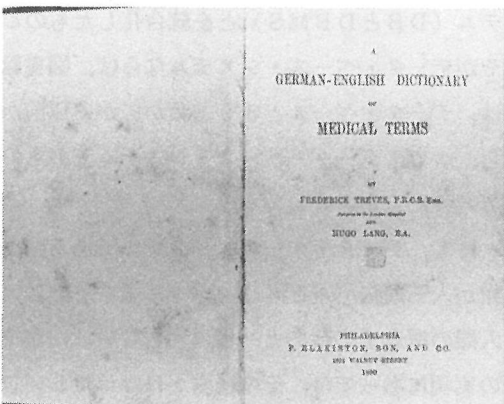
医学の世界では半世紀以上もまえの書物という、文献的な価値はもはやほとんどなく、逆に希少価値が出てくる。ことばをかえれば古典化してくるということになる。数年まえ、某医学出版社が医学古書目録を作成したが、これは、全国的に所蔵されている1911年以前発行のすべての医書を網らせんとするものであった。

さて、このシリーズでは、主として1920年代前後のドイツ関係の医書を取りあげてみたい。

19世紀末から20世紀初頭にかけては、ドイツの医学が世界をリードしていた。現在の医学超大国であるアメリカ合衆国からも多くの医学者がドイツへ留学していた。有名な William Osler (1849~1919) もカナダの McGill 大学を1872年に卒業したあとドイツに留学し R. Virchow (1821~1902) の講義を聴いている。

そのようなわけで、当時は独英医学用語辞典というものが必要であった。写真は、1890年、Philadelphia の Blakiston 社より出版されたもので403ページに約1万6000語がおさめられている。著者の一人 Frederick Treves (1853~1923) は英国ロンドン病院の外科医で plica ileocecalis の発見者として知られ、これは Treves' fold ともいわれ外科的解剖学のうえで重要である。もう一人の Hugo Lang は語学者であろう。私の所有するものは、1890年3月12日、ペンシルヴァニア大学、J. カワモトのサインがあり、別に佐伯某の蔵書印がある。背革装丁であるが90年以上経っているので、かなりいたんではいる。

ドイツの医書出版社が、つぎつぎと英語の専門書を出している最近の状況と比べると、今昔の感がある。(泌尿器学講座・教授)



(17.5 × 12 cm)



(内容の一部)

人工頭脳と図書館

＝データ・ベース・システム雑感＝

谷口敏夫

☆ ここ10年以上にわたって、折にふれて人工頭脳に関係する小説や、映画に親しんできた。人工頭脳というのは、中世の錬金術に似て、幾分のまがまがしさと、そこはかたないロマンティズムに彩られている。

人工頭脳の最初の原形は、硝子瓶の液体の中でひくひくと動くピンク色の脳、それに接続された線、チューブ。フランケンシュタインのイメージと重なっていたのかもしれない。

しかし、学生の頃、くいいるように見たある映画のイメージが、その後の人工頭脳の正像として定着することとなった。人工頭脳の名はハル。ハルは宇宙船の頭脳、二つの目的を与えられていた。一つは乗組員を助けて、木星探検を行うこと。もう一つは、乗組員にも、人類にも知らせてはならない、極秘の探検。この映画は人工頭脳がその目的下での二つのアルゴリズムの矛盾の中で、次第に狂っていく様子が実にリアルに描かれていた。船長の質問に空っぽばかり、かまをかけたり、あげくに乗組員の殺害を図り、半ば成功してしまう。

☆ しかし又、ハルはボーマン船長にとっての唯一の図書館、知識の源泉としての機能も持っていた。ハルは単に Storage にある文献のコピーを出力したり、ディスプレイ上に示すだけではない。質問に対して、直接的に説明や答を返してくれるのである。それは宇宙船の状態から、うまいコーヒーのいれかたまで、少なくとも現代の図書館からは想像出来ない程の情報サービスを、Library として提供してくれるのである。

人間が何かを知りたい、行動の指針となる正

確な情報を得たい、と思った時、現代の人間は図書館へ行く。何故なら、そこには知識が、二次元的に分類された書物があるから。しかし、未来のボーマン船長はハルにじかに語りかける。何故なら、ハルの Storage は、知識・情報が立体的・階層的に構築された、人工頭脳そのものだから。

☆ 図書館とはデータ・ベース・システムである。書物という知識・情報がそこには集積され、利用されるのを待っている。一般的にデータの集合がデータ・ベース (DB) と呼ばれているのだから、書庫はコンピューターの記憶装置にたとえられる。とすると、目録類や、図書館員のサービス業務は、DBMS (Data Base Management System) そのものと云える。

DBMS 本来の意味が、データを構造的に整理し、データの検索を行い、データの更新、保守管理を容易に行うためのソフトウェアと考えられるからである。

そのようなデータそのものと、その管理システム (DB と DBMS) とを統合化したものがデータ・ベース・システムならば、図書館は、データ・ベースという言葉が広がる以前から、すでにデータ・ベース・システムそのものであった、とさえ云える。

☆ さて、データ・ベース・システムである図書館が人工頭脳ハルと同じレベルに達するのは、人間の概念上ではあと一步にすぎない。だがその実現にあっては、その径庭がはなはだしい。

しかしぼんやりと、新しい図書館の像が見えてきた。まず新しい情報、図書や雑誌が入った

時、その内容そのものを、データ・ベース内の既存の情報の中にどう位置づけるかという問題について考えること。幾何平面上でたとえてみるならば、ある書物の内容と、すでにある知識との距離及び方向（ベクトル）とを定めることにより、データ・ベースの自動的編成を行うこと。次に、この再編成は、より人間の記憶モデルに近接した階層構造であること。具体的には、文献の分類構造を平面的ではなく、立体的、すなわち多面的検索にたえるように、再構築することである。



石黒達也

玉機微義（劉彦純編 正統己未刊，4帙，全22冊）

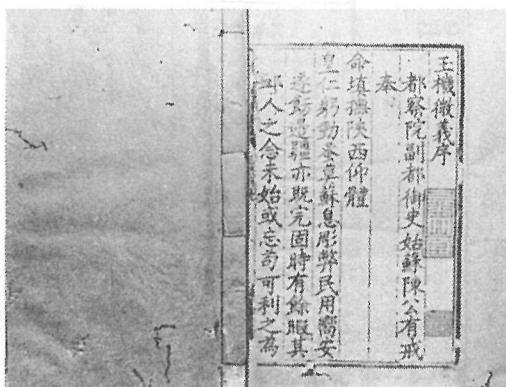
明の正統11年（1439），劉彦純（呉陵）が編纂した医学全書。編者の自序に代って，大学士・廬陵揚が序文を寄せている。それによると，「医家は神農，軒轅（黄帝），岐伯，伊尹，張仲景などの古典的医籍を基本としているが，これらの書は総じて難解である。名医は晋，唐，宋の時代にも出たが，医学の奥義を極めたのは，近代になって張元素がはじめてである。その後元素の医は，李杲，王好古などに継承され，遂に朱彦脩（震亨）にいたって医の正（統）派が成った。本書の編者・劉彦純は朱震亨に私淑する者であるが，医家の王道はやはり張元素にある。従って本書では素問，難経，金匱の他に，元素一派の説をひろく採用した。本書に従って施術すれば，たとえ上医でなくとも成功は間違いない。」という意味のことが記されている。

☆ 図書や雑誌そのものがコンピューターのメモリーに入っているのかどうか，書名順に並んでいるのかどうか，という問題よりも，その知識自体が図書館で，どのように整理され，どのような構造を持っているかを考えるのが，この場合重要である。

けだし，現代のハルは人工頭脳としてではなく，データ・ベース・システムという名のもとで幼年期を送っている。しかもその生れる以前は，「図書館」という別名を予定されていたのかもしれない。

（整理係長）

〇〇



本書は実用の目的に編纂されているので，古今の方を悉く網羅した百科辞典的な要素はない。「中風」，「痿」，「傷風」といった症候を50門に分ち，それぞれの項目について，内経や金匱などを引用して解説を加え，最後に諸家の方を紹介している。明時代の実地医療をうかがい知る格好の書である。

医宗金鑑（御纂，乾隆14年刊，8帙，全90巻）

上述の玉機微義が私撰の医学全書であるのに対し，本書は乾隆皇帝の勅命によって編纂され

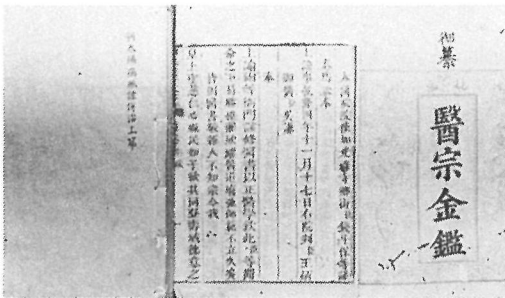
た官撰の全書である。勅を受けたのは大学士・鄂爾泰であるが、実際の編纂に関与したのは呉謙らの医官であろう。完成したのは清朝の最盛期・乾隆14年（1749）の事である。

冒頭の奏疏によると、「医書の中で最も古いのは本草、靈樞、素問、次いで難経である。しかるにこれらの書には法（理論）はあっても、方（治療法）を欠いている。法と方を兼備した書は医宗・張仲景の傷寒論と金匱を嚆矢とする。しかし傷寒・金匱の解釈には異説が多く一定していない。そこで本書では、はじめに傷寒論・金匱の錯謬を正し、その上で註釈を加えた。次いで古今の医書から諸家の発明を集め、初学者には誦読の便なるように、また博者には学を成

す参考になるように編纂した。今後医を学ぶ者も教える者も、必ず本書を参考されたい。」とある。この奏疏文でも明らかなように、本書も上記の玉機微義と同様、実用を目的としているので、内容は古今の方の単なる羅列にとどまらず、编者自身の見識に基いて種々の方を取捨選択している。初学者向けの部には、復誦・暗記しやすいように四言一句または七言一句の要訣をまず掲げ、その後に註釈を加えている。経験者向けの部には要訣はなく、たゞ文章（要旨）による説明があるだけである。また、理解の便ならしめる為、痘疹・外科・眼科・正骨・刺灸などでは附図もある。

本書の編纂は清朝の国家的事業として行われ、公刊された書はもとより、家蔵の秘書や世伝の経験良方にいたるまで、古今の医書が悉く収集された。従って、本書は中国臨床医学のいうなれば集大成であり、本書以後中国では医学全書の発刊をみないので、現代の中国医学を知る上には必読の書である。

（産科婦人科・講師）



図書館の活動

- 4. 8 近畿地区国立大学図書館協議会（京大）
- 4. 8 第1回近畿北部地区国立大学図書館機械化ネットワーク協議会（京大）
- 4. 24 第21回図書館委員会
- 5. ²¹/₂₂ 昭和56年度国立大学図書館事務部課長会議（東医歯大）
- 5. 25 第1回近畿北部地区国立大学図書館機械化ネットワーク協議会開発委員会（京大）
- 6. 1 新館長友吉唯夫教授（泌尿器学）発令
- 6. 2 第50回近畿地区国立大学図書館協議会総会（滋大）
- 6. 5 第23回近畿地区医学図書館協議会例会（神大）
- 6. 22 第6回新設国立医科大学図書館会議（沖縄）
- 6. ²³/₂₄ 第28回国立大学図書館協議会総会（沖縄都ホテル）